

「底が突き抜けた」時代の歩き方 108

日本型の組織にとって「戦後」とはなにか

戦中の日本軍隊の敗北の仕方と、戦後の日本企業の潰れ方の類似を指摘する記述を最近よく目にする。ソフト化経済センター理事長日下公人と日本大学講師三野正洋が、『日本陸軍を見れば潰れる企業がわかる』のタイトルで行っている対談（『週刊文春』00・8・10）も、その一つである。そこからいくつかの指摘を拾い上げてみる。

戦前の最大組織の陸軍（戦争末期には350万人程度）と、戦後の最大組織の国鉄（40数万人）は、「日本の近代化の牽引車となった輝かしい側面が確かにあったが、共に組織が大きすぎて危機感を持たなかった。」「日本の陸海軍にしてもミッドウェーの敗北以降、米軍の攻勢は日増しに強まって」くるのに、「国鉄にしても巨大な累積赤字はもう天文学的になってくる」のに、「結局何とかなるっていう考えが支配的だった」。

「陸軍にも戦後日本の官庁や大企業にも都合の悪い情報は隠してしまうところが共通して」いる。「撤退を転進とゴマカした例の『大本営発表』がいい例ですが、厚生省にしても警察にしても『カクシ』の体質は変」わらない。雪印や三菱自工も同じである。「昭和3年に関東軍の河本大作参謀が張作霖を爆殺した。ところが軍首脳部はその事実を厳秘にして処罰をしなかった。この一件こそ軍部暴走の端緒となり、後の陸軍崩壊の要因」になったが、「官庁にしても警察にしても大企業にしても『カクシ体質』は一向に」改まらず、「それに、金融機関の責任者が起訴され」ても、「みんな執行猶予。財産なんかも没収されることはない」。

「幕僚、参謀で思いつくのは、満州事変以後、陸軍省など中央の佐官クラスや現地軍の参謀たちが系統を無視して陸軍全体を引きずったきらいがあり」、「これはバブルの渦中で銀行の中堅行員が必ずしも銀行全体の意思とはかかわりなく、どんどん融資をして株や土地にお金を注ぎこんでいった」ことと似ているような気がする。「総理大臣が景気刺激だと言ったら、大蔵省はもっと貸し出せ、もっと貸し出せ」で、「『特金』なんて制度にしても、山一証券なら山一証券が大蔵に聞くと、やんなさいと言う。しかし、ある日突然バブル引き締めという命令が下ると特金制度は廃止。それで瞬時におかしくなってしまった」。「右上がりの経済を信じて軽々に権力を動かしてた」点で、大蔵省と大本営は同じである。

「今の企業も昔の陸軍も、優秀な人材を沢山抱えているにもかかわらず先が読めないところがあり」、「これがいいと思うと猪突猛進して歯止めが利かない」。「あのダイエーがどうしてこれだけへこんだのかを考えると、とにかく安さ至上主義で、とにかく安ければ大衆に受け入れられると信じ切ってる感じがある。（中略）そうした安さ至上主義の

ようなことを信じ切ったのが日本陸軍の白兵戦至上主義。要するに突撃主義ですね。これがいいとなったら優秀な人材が沢山いるにもかかわらず誤った流れを喰い止められない。」

「日本人は過去の失敗を最後の最後まできちっと分析することが苦手」で、「日本陸軍の教訓がほとんど生かされていない気がする。過去の失敗を生かすことがまったく苦手な国民です」。昔は軍隊にも日本人にも従順さがあり、「全体をよく心得て自分をそれに合せるという自己犠牲の心」をもって、「日本人は基本的にはよく堪え忍んで、みんなのために合せる」。そのことは、「非常に文明度の高い国民で、底辺が優秀、それだからこそ上が腐敗する」。

以上列記してきた指摘には誰もが素直に肯くことと思われるが、ただ最後の、日本人の従順さによって「底辺は優秀、上は腐敗」の図式には異論がある。その従順さも集団内の処世とけっして無縁ではなく、敗戦直後の混乱時にそれまでの従順さをかなぐり捨てて、できるだけ多くの軍隊の物資をリュックに詰め込んで帰省した復員兵たちの姿があちこちで見られたことを考えると、日本人の従順さは底辺も上も腐敗させていたのではない。上の腐敗は必ず底辺の優秀さを侵さずにはおれないのである。

もう一つ、気になるのは、「戦争を数値的に調べてみると、日本の陸軍のようにまさに`玉砕`するまで戦い抜いた軍隊というのは近現代史の中で他国には皆無」で、「特に島で戦った場合、構成員の1パーセントぐらいしか生存者がい」ない。「スターリンの粛清の恐怖があった」第二次大戦でのソ連の赤軍ですら、「5パーセント程度」であることを考えると、「日本陸軍の強さというのは、よく言えばまさに死ぬまで戦う最強の軍隊と言うことができるし、別な見方をすればこれほど頑迷に戦う必要はあるのか」ということで評価が分かれる」という指摘である。この指摘に欠落しているのは、戦前の日本は「国のために死ぬる国」であって、兵士は「死ぬまで戦う」ことを強要されていたという背景である。「これほど頑迷に戦う必要はあるのか」ではなく、退路を断たれていたために、「これほど頑迷に戦」わざるをえなかったのだ。

「国のために死ぬる」日本人であることの従順さを叩き込まれてきたのであって、この「国のために死ぬる」日本人は戦後、「会社のために死ぬる」日本人として受け継がれてきたのではなかったか。数値的にはわからないが、かつての日本陸軍の`玉砕`率同様、企業幹部の`玉砕`率も世界ではかなり高い気がする。また、死ぬ覚悟を持った日本陸軍が生きる覚悟を持った他国の軍隊に較べて、本当に「最強の軍隊」であったかどうかは疑わしいが、仮に「最強の軍隊」であったとして、戦争というものがその「最強の軍隊」だけで戦われるものではないことも明白である。その「最強の軍隊」が活かされる戦い方であったのかどうかは検証されなくてはならない。このことに関連して、『必勝か必敗か』と題した00年8月23日付朝日新聞の『経済気象台』コラム欄の全文を次に転載しておく。

「バブル崩壊の始まったころ、今は故人になられた某財界首脳の講演を聞いた。ニュー

ギニア転戦 4 年の苦勞に比べれば、今度の経済危機はきっと乗り越えられる、という話だった。

ニューギニア戦線はどんなに大変だったのか興味がわき、最近、日本パプアニューギニア友好協作成の戦史と、米国人学者の『マッカーサーのジャングル戦争』を読んだ。

米陸軍は緒戦で負けた後、マッカーサー司令官のもと、必勝を期して反攻してきた。これに対し日本は、負け戦つまり必敗を知りつつ、本土決戦を遅らせるため 3 年間、時間稼ぎの消耗戦を続けた。

当然、日本側の説明は悲壮なものになる。南方戦線が伸び切ったところで、ガダルカナル島で大敗した。以後、ニューギニア北岸で東から西へじりじり敗退を続けた。猛烈な爆撃、兵員輸送船の撃沈・武器・弾薬・糧食の欠乏、マラリアのまん延、豪雨・密林・高山・断がいと、悪夢の連続で、22 万人が玉砕、餓死、病死し、生還は 13 万人だけだった。

米側の話は明快だ。反攻に転じてからは、ニューギニアからフィリピンを経て、日本本土に攻め上がろうとした。物量で圧倒して制空権を握り、暗号解読で日本軍の動向を読んだ上で、勝てる戦いのみを選んで勝った。

自然条件の劣悪さには日本と同じく悪戦苦闘したが、マラリア対策では攻撃前に敵陣にすら DDT をまく徹底ぶりで撲滅した。

日本は戦争の悲惨さを強調するが、それは無謀で無責任な戦争指導部がそうだと承知で、限りなく兵隊を注ぎ込んだ結果なのだ。

バブル崩壊後の 1990 年代、政府、銀行、企業は責任が自らに及ぶのを何とか避けようと、時間稼ぎの消耗戦を続けた。それは今振り返れば、軍部と同様、必敗のシナリオだった。

次の 10 年こそ、歴史の愚を繰り返さず、必勝のシナリオをとりたいものだ。」

どんな戦争であれ、傷つくのは大衆だから「戦争自体がダメ」という論理に照らしても、必勝を期す米と必敗で臨む日本の差によって、兵士大衆の傷のつき方に大きな違いが生じるのに無関心ではおれない。戦争での死傷者をできるだけ少なくして必勝を期す米は、少なくとも人間の命を考慮に入れる国であるのに対して、「必敗を知りつつ、本土決戦を遅らせるため」に戦争での死傷者の数に無頓着な日本は、人間の命を考慮に入れない国であったことが、ニューギニア戦線からわかる。「本土決戦を遅らせる」のも、本土の大衆を守るためではなく、大本営を守るためであったことも推測がつく。更に、兵士を「国のために死ぬる」要員としてしか扱ってこなかったことが、有効な戦い方を損ね、必敗の無謀さを招来したことにつながるなかで、皮肉なことに「突撃主義」一直線の「日本陸軍の強さ」こそ、がより一層の死傷者を増加させていただけのことであったのも疑うまでもない。

00 年 9 月 13 日付毎日新聞の『経済観測』コラムは、「米格付け会社のムーディーズが日本国債の格付けを『Aa1』から『Aa2』へ引き下げた」ことに政府・与党が

「不快感を示すだけに終始している」問題に言及している。95年8月、「ムーディーズは銀行の『財務格付け』を発表し、不良債権の多さを理由に「日本の銀行の評価は惨たんたるもの」で、対象50行中、合格とされたCランクまでが13行、37行が「問題ありのD、Eとされた。大蔵省はその格付けに抗議し、「護送船団方式の堅持をうたい『一行たりともつぶさない』と豪語した」が、Eランクの北海道拓殖、日本債券信用、Dランクの日本長期信用が破綻することになった。

危機感を持つことなく、抗議や不快感のみでやり過ごそうとするこの光景は、「結局何とかする」と思って手を拱（こまね）いていた日本陸軍を彷彿（ほうふつ）させる。

「過去の失敗を生かすことがまったく苦手な国民」は、敗戦から肝心なことを何も学ばず、すぐやってきた戦後の繁栄に浮かれて、「戦前のまま」雪崩れ込んでしまったのだ。

「第二の敗戦」という言葉があるが、戦後の高度成長は戦前の日清、日露戦争の勝利に相当し、バブル崩壊以降の日本は第二次大戦に巻き込まれていく戦中の日本に擬せられるかもしれない。いずれにしろ、戦後日本の組織形態は敗戦に見舞われずに、戦前日本からずっと生き残ってきたことは明白である。たぶんもう一度本当の敗戦に直面することによってしか、日本型のあらゆる組織は壊滅することはないだろう。

2000年9月23日記